

第 118 回緩和ケアチーム抄読会

2012 年 10 月 31 日

橋口 さおり

Patients' Expectations about Effects of Chemotherapy for Advanced Cancer.

Weeks JC, et al

NEJM: 367(17) 1616-24 2012

進行がん患者の化学療法に対する期待

【背景】 進行大腸がん、肺がんに対しては抗がん剤の投与がその主たる治療法である。近年目覚ましい進歩が見られるものの、完治は難しく、その延命効果は週単位、月単位である。投与には症状緩和の意味もあるが、同時に副作用の危険がある。

患者は抗がん剤投与を受けるかどうかを決めなければならないが、そのためには現実を知る必要がある。先行研究では、効果の見通しについて、医療者と患者には差があることが報告されている。いくつかの研究では、抗がん剤投与が根治的治療であるとの誤解があることが報告されているが、要因についての検討はされていなかった。National Cancer Care Outcome Research Surveillance (CanCORS)のデータを用いて、患者の期待とその誤解の要因についての検討を行った。

【方法】 米国 5 地区、5 大医療保険組織、15 の在郷軍人局 にあるデータから 2003 年-2005 年の間に新たに大腸がんまたは肺がんと診断された 20 歳以上の患者を抽出。専門のインタビュアーが診断された 4-7 か月後に性格、意思決定、どのようなケアを受けたか、アウトカムにつき調査した。

質問内容：担当医と話したあと、どのように思いましたか？

抗がん剤投与は延命効果がある

根治的治療である

がんによる症状を緩和する

解答：とてもそう思う、いくらかはそう思う、少しそう思う、まったくそう思わない、わからない

調査項目：

年齢、性別、教育、人種、文化、婚姻、収入

コミュニケーション調査 担当医は話をよく聞いた、丁寧に説明した、がんに関する十分な情報を与えた、がんに関する質問に答えた、礼儀正しかったか (0-100 のスケール)

身体状況 European Quality of Life-5 Dimensions (EQ-5D)

意思決定における患者の関与 : Patient controlled, shared control , physician-, Family,

【結果】

1274 名の患者のうち 1193 名が抗がん剤投与を受けた。

図 1：抗がん剤治療に対する効果の期待

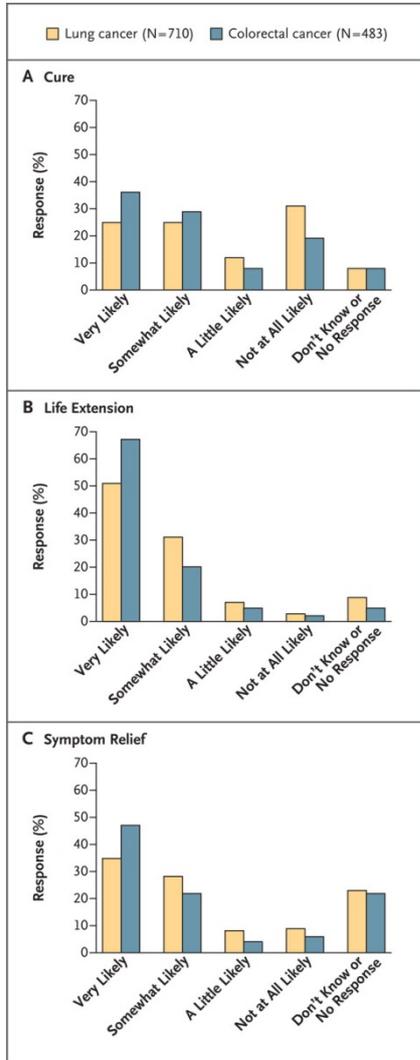


表 1) 抗がん剤が根治的であると回答した患者の分析

肺がん患者の 69%、大腸がん患者の 81%が根治的であると誤解していた。

白人よりも有色人種にその傾向が強かったが、収入と教育レベルにはよらなかった。

医師とよくコミュニケーションされているほうがリスクが高かった。

地域などのネットワークでケアを受けている患者はリスクが低かった。

【考察】

本研究では診断された 4-7 か月後の調査であり、早い段階での動向を知ることができる点で優れている。患者が根治できないことを理解していないと、適切なケアを受ける機会が奪

われる可能性がある。

人種差が出たことについては、教育レベルや収入に差がなかったことから、文化的な差異ではないかと考える。また、医師の態度が患者の決定に影響を与えている可能性がある。医師と患者のコミュニケーションが良いと、楽観的な見通しをたてるのではないか。また、地域でケアを受けている患者に誤解が少なかったことから、**provider** が理解を助けている可能性がある。オンコロジストは患者に根治が難しいことを伝えるが、それだけでは正しく理解されない。これまでは、理解を難しくする要因として、信頼関係の欠如、思い込み、専門用語の使用などが挙げられてきた。今回のスタディでは、抗がん剤そのものが誤解のもとになりうるといえる。

今後、すべての医師は患者の信頼と尊敬を得るコミュニケーションを身に着ける必要がある。患者の抗がん剤への非現実的な期待ではなく、効果的な終末期ケアを適切な時期に導入する努力が必要である。